

Immediate Press Release 2013.10.10

五線譜に描いた夢—日本近代音楽の150年

150 Years of Modern Japanese Music

謹啓 初秋の候、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。平素は東京オペラシティ アートギャラリーの展覧会活動に対して格別なご高配、ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、当館では、2013年10月11日より「五線譜に描いた夢—日本近代音楽の150年」を開催いたします。

日本の音楽は、19世紀後半に西洋近代の文化と接触することによって、新たなスタートを切りました。黒船の軍楽の響きは鎖国時代の終わりを知らせ、アメリカ人宣教師たちが教える英語や讃美歌は、新しい時代の到来を告げました。明治維新政府は教育制度に西洋音楽を積極的に導入し、近代国家にふさわしい音楽の構築を試みます。以来150年、日本の近代音楽は、ときに国内外の政治情勢に翻弄されながらも、芸術文化の諸領域と連動し、今日の音楽文化の隆盛を築いてきました。

本展は、時代とともに歩んできた日本近代音楽の激動の150年をたどるものです。明治学院大学日本近代音楽館の所蔵資料を中心に、全国の資料館、美術館および個人蔵の貴重な資料も加えて、開国以来の音楽を中心とした文化史を立体的かつダイナミックに再構成します。

つきましては、この「五線譜に描いた夢—日本近代音楽の150年」を貴誌上で是非ご紹介いただきたく、周知・告知活動にご協力賜りますようお願い申し上げます。

謹白

[開催概要]

展覧会名： 五線譜に描いた夢—日本近代音楽の150年
 会期： 2013年10月11日[金] -12月23日[月・祝]
 会場： 東京オペラシティ アートギャラリー
 開館時間： 11:00-19:00 (金・土は20:00まで/最終入場は閉館の30分前まで)
 休館日： 月曜日(祝日の場合は翌火曜日)
 入場料： 一般1,000(800)円/大・高生800(600)円/中・小生600(400)円

- * 同時開催「収蔵品展046 聖と俗」、「project N 54 大垣美穂子」の入場料を含みます。
- * 収蔵品展入場券200円(各種割引無し)もあり。
- * ()内は15名以上の団体料金。その他、閉館の1時間前より半額、65歳以上半額。土・日・祝日の中・小生無料。
- * 障害者手帳をお持ちの方および付添1名は無料。割引の併用および入場料の払い戻しはできません。

お問合せ： 03-5777-8600(ハローダイヤル) ウェブサイト <http://www.operacity.jp/ag/>

主催： 公益財団法人 東京オペラシティ文化財団/明治学院大学/
 NHK プロモーション/日本経済新聞社
 協賛： NTT 都市開発株式会社
 協力： 株式会社ヤマハミュージッククリエティング

■本リリースに関するお問い合わせ

東京オペラシティ アートギャラリー 【展覧会担当】 堀 【広報担当】 吉田
 Tel: 03-5353-0756 / Fax: 03-5353-0776 / Email: ag-press@toccf.com

「展覧会のみどころ」目で見る音楽史

幕末・明治に日本人が初めて西洋音楽に触れてから今日まで150年。現代の思想や文化にもつながる大転換期を日本人は経験しました。本展は文化史を軸に、日本人がどのように西洋音楽を受け入れ、どのように音楽と向き合い、自分たちの音楽をつくり上げてきたかをたどるものです。それは、日本人にとっての音楽とは何かを問いかける試みとなるでしょう。明治学院大学図書館附属日本近代音楽館には約50万点の資料が保管・公開されています。本展では同館所蔵の資料を厳選し、さらに日本各地の博物館、資料館、図書館などの機関や、個人所蔵の資料を加えた約300点によって、日本近代音楽の歩みをたどる初の試みです。



『新撰讃美歌』
1891 日本近代音楽館蔵

展示は、楽譜、楽器、書簡、公演プログラム、レコード、絵画などの多様な資料によって構成されます。さらに、時代の息吹を実感できるように、時代背景をわかりやすく映像で伝えるコーナーを4つのセクションに設けています。時代の変化を詳細に映し出す構成は、150年という歴史をまさに駆け抜けるかのように感じられることでしょう。また、実際の音楽を聴くことで、視覚だけでなく、聴覚を通じて体感することができます。激動の時代を生きた先人たちが五線譜に描いた夢は、現代の私たちの心にどのように受け継がれているのでしょうか。



ヘリコンバス ヘッケル社製
1880頃 警視庁音楽奏蔵

I. 幕末から明治へ

19世紀後半、日本の音楽は開国を契機に西洋音楽との接触によって大きく転回しました。外国軍隊の軍楽の響き、J.C. ヘボンをはじめとするキリスト教宣教師たちが歌う讃美歌は、幕末維新期の人々の耳と感性を新たな音楽へと開いたのです。

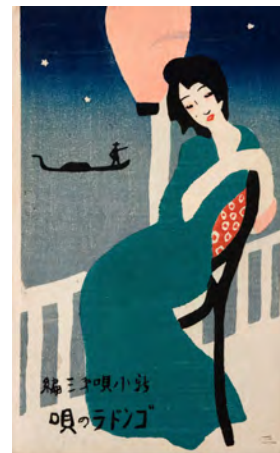
近代国家形成を目指す明治新政府がとり入れた欧化政策は、政治、社会、文化の隅々に及び、音楽も例外ではありませんでした。西洋音楽は日本の近代的教育制度の一環として、音楽教科になり、音楽教師の養成とともに始まった唱歌の作曲と普及、文学界も巻き込んだ「総合芸術」オペラへの関心と創作、演奏家の養成、音楽会場の建設、聴衆の誕生、そして日本音楽の研究と「改良」へと続きます。江戸後期の蘭学者・宇田川榕菴ようあんの翻訳の仕事を起点に西洋音楽の受容と土着化の軌跡を追います。



『山田耕作童謡百曲集』第1集、第2集より
1927 日本近代音楽館蔵

II. 大正モダニズムと音楽

日本の20世紀音楽は山田耕作こうさくをもって開始されたといっても過言ではありません。山田はベルリン留学から帰国後のデビューコンサートで大成功を収め、常設オーケストラの創設の試み、モダンダンスの開拓、カーネギーホールでの自作発表はもちろん、多くの日本語歌曲の作品の数々など、その活躍は人々の期待に十二分に応えるものでした。彼をとりまく同時代の音楽は、芸術



中山晋平「ゴンドラの唄」(セノオ・新小唄3)
1916 (6版1918) 日本近代音楽館蔵

歌曲創作の試み、『赤い鳥』をはじめとする芸術的童謡の提唱、新日本音楽運動、浅草オペラに象徴されるオペラやオペレッタ（喜劇的題材を用いた短いオペラ）の隆盛と流行歌へと広がります。音楽は青年層の広範な支持を得て、教育から芸術へ、娯楽へと多彩に展開したのです。

第一次世界大戦とそれに続くロシア革命の影響は大正期の音楽界にも及びました。開戦を前にして帰国を余儀なくされた日本人留学生たちは国内で新しい音楽シーンを創出しました。また、戦後の混乱を逃れて極東を訪れた当代の名手たちは帝国劇場を舞台に本場の音楽を届け、若き作曲家プロコフィエフは渡米の途次に立ち寄った東京で自作を発表したのです。大正の音楽は若々しいエネルギーを湛えて私たちに迫ります。

Ⅲ. 昭和の戦争と音楽

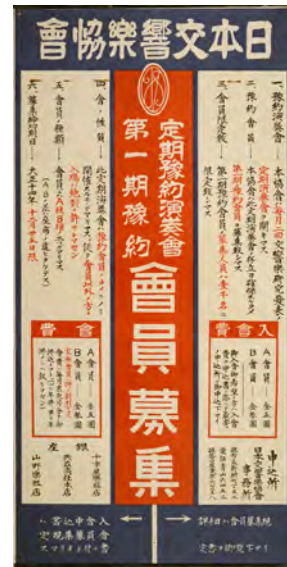
昭和に入って登場した新たなメディア—1925年に開始されたラジオ放送、大正半ばから一般に普及し始めたレコード、昭和初期に姿を現したトーキー映画—は、昭和の音楽を彩ります。欧米の有名演奏家によるレコードに耳を澄ますクラシック・ファンが生まれ、映画の主題歌がレコードに吹き込まれて流行するようになりました。しかし軍靴の音が次第に近づき1931年の満州事変以降、日本は戦争の時代を迎えます。

政府奨励による「愛国歌」や軍国歌謡ばかりでなく、健全な家庭で歌える流行歌を企図して作られた放送番組「国民歌謡」なども含めて、戦時に向けて国民のモラルを作り替えようと、音楽は戦時色に染め上げられていきました。

Ⅳ. 「戦後」から21世紀へ

戦後の日本の音楽は欧米の戦後音楽と連動して進行します。終戦時に10代から20代の青年であった日本の若き作曲家たちの関心は、伝統的な「西洋音楽」に懐疑的な欧米の前衛音楽家、シェーンベルク、メシアン、J. ケージらに向けられました。1951年に結成された武満徹らの実験工房や、57年の柴田南雄らによって設立された二十世紀音楽研究所が試みた研究と実験を通して、作曲家たちは自らの音楽語法を形成すると同時に、「日本の音楽」を世界の音楽のひとつとして自由に捉え返す契機を掴もうとしたのです。

戦後から今日に至る音楽の歩みは、創作においても演奏の領域でも、日本の音楽が世界の音楽活動の重要な位置を占めるに至った道程を示しています。本章では戦後の焼け跡の時代から今日に至る音楽の変遷を、国境を越えて活躍する作曲家らとともにたどります。



日本交響楽協会定期予約演奏会会員募集ポスター
1926 日本近代音楽館蔵



戸田邦雄 12音技法研究試作楽譜（手製五線紙）
1948頃 日本近代音楽館蔵



二期会第1回オペラ公演「ラ・ボエーム」プログラム
1952 日本近代音楽館蔵

〔関連企画〕 ミニ・コンサート

第1回 11月2日〔土〕 <幕末・明治の器楽曲>
滝廉太郎「憾(うらみ)」「メヌエット」(ピアノ独奏)
幸田延「ヴァイオリンソナタ 変ホ長調」ほか

第2回 11月9日〔土〕 <明治のうた>
滝廉太郎「荒城の月」原曲 & 山田耕筰編曲版
岡野貞一「故郷」ほか

第3回 11月16日〔土〕 <西洋の音・日本の響き>
萩原朔太郎「機織る乙女」(マンドリン演奏)
宮城道雄「春の海」(箏&ヴァイオリン二重奏)ほか

第4回 11月23日〔土・祝〕 <大正ロマンのうた>
スッペ「ボッカチオ」から「ベアトリ姉ちゃん」
山田耕筰「からたちの花」ほか

第6回 12月7日〔土〕 <昭和の戦時歌謡>
古賀政男「丘を越えて」
林伊佐緒「出征兵士をおくる歌」ほか

第7回 12月14日〔土〕 <新時代のメロディ>
團伊玖磨「花の街」
武満徹「翼」(歌曲)ほか

会場=アートギャラリー展示室内/時間=13:00/15:00(各回約30-40分)

参加費:当日の入場券が必要です。

予約不要(満席の場合は立見となります。また、当日の参加状況により、入場制限を行う場合がありますのでご了承ください。)

第5回 11月28日〔木〕 <しのびよる軍靴の音> *会場は近江楽堂
橋本國彦「斑猫(はんみょう)」(歌曲)
松平頼則「フルーツとピアノのソナチネ」ほか

第8回 12月20日〔金〕 <戦後の器楽曲> *会場は近江楽堂
黛敏郎「BUNRAKU」(チェロ独奏)
三善晃「弦楽四重奏曲第3番《黒の星座》」ほか

会場=近江楽堂/時間=14:00(1回のみ、約1時間)

参加費:当日の展覧会入場券と整理券が必要です。

定員:100名[当日先着順/12:00よりアートギャラリー受付にて整理券配布、おひとり1枚のみ]

※演奏曲目は変更する場合があります。

関連イベントの詳細はウェブサイトをご覧ください。

<http://www.operacity.jp/ag/exh157/>